

氏 名	カンニ 康 妃
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 402 号
学位授与年月日	平 成 25 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈論文〉 情報社会における印刷物 — 「真実」、「風景」、「寄生」について 〈作品〉 「理想的な秩序」 「小豆島の絵葉書」 「和歌」 他

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教 授 (美術学部)	保 科 豊 巳
(論文第 1 副査)	〃	〃 (〃)	越 川 倫 明
(作品第 1 副査)	〃	〃 (〃)	坂 口 寛 敏
(副査)	〃	准教授 (〃)	三井田 盛一郎
(〃)	〃	〃 (〃)	齋 藤 芽 生

(論文内容の要旨)

本論では、「真実」、「風景」、「寄生」という三つの側面から印刷物——とりわけ世間に大量に出回る廉価な印刷物——について考察する。これらの側面は、私自身が印刷物を用いて芸術創作する際にも、重要な契機となっている。これらの分析を通して、情報社会における印刷物の属性を明白にしたい。

第一章「印刷物と真実」では、印刷物の中の「真実」について考察する。印刷物という媒体それ自体、あるいはそれによって示される意味や内容について、それが真実であるかがしばしば問われる。印刷物には、そこに表された情報がメディアの特性に適應するように加工されているのではないかという疑いがつきまとう。そもそも、印刷物における真実とは何か。第一章では、この点について、印刷物が重要な役割をもつ映画「トゥルマンショー」と、印刷物を用いて創作された美術作品を例に挙げながら検討する(第一節)。第二節では、私自身が作品で使用した、世間に大量に出回るチラシの真実性について述べる。とりわけ、中国の不動産屋のチラシを例にして、宣伝広告の虚構的な描写と中国の社会状況について記述しながら、印刷物に生じた一種の「アウラ」について考察する。その際、これらのチラシを用いた作品「理想的な生活」の創作過程にも言及する。

第三節では、印刷物の中の隠された情報について論述する。印刷物には、作成者が伝達したい明白な情報がある一方で、無意識のイデオロギーや隠された意図がある。それゆえ印刷物は、それが作成された時代や階級の痕跡を帯びやすい。本論では一つの例として、ソ連時代に撮影され政治情勢とともに改ざんされた一枚の写真を取上げる。また、中国の不動産屋のチラシについても、そこに隠されている情報と中国人の潜在意識について分析をする。隠された情報は「真実」そのものではないが、印刷物の「真実」に通じている。人々は印刷物の様々な情報の断片を辿ることで、表象の背後にある「真実」につながることができる。

第二章「印刷物と風景」では、引き続き中国の不動産チラシを例に挙げながら、そこに見いだされる典型的な風景様式について論述する。第一節では、このような風景様式について中国の伝統的な風景画から考察をする。このような風景様式を、私たちは印刷物から日常的に受け入れている。観光地で売られている絵葉書にみられるような風景図像もその一つである。このような特定の様式はバーチャルメデ

ィアにもそのまま転用されているのみならず、現実世界での風景の見方をも規定している。このことを明らかにするために、第二節「絵葉書式の風景」で、符号化された風景、擬態化された自然について論じる。そして、このような定着した風景の見方は、人間の自然に対する態度を反映していることを指摘する。

私の創作も符号化された風景に重点を置いて行っている。私はそのような規定された風景の見方について反省させることで、人に人間と自然の関係に注意をむけさせようと試みた。作品にとって鍵となる、人々とのコミュニケーションをスムーズに進めるために、私は日常的に受け入れられている形式（「小豆島の絵葉書」）や人々の習慣的な行為モデル（「風景」）を、使用した（第三節）。

第三章「印刷物と寄生」では、無料の印刷物の「寄生」という特性について分析することによって、私の作品の「寄生性」及び「寄生物」としての芸術上の立場を明白にする。社会の中で、私たちは大量の印刷物をどこでも見ることができる。但し、ベンヤミンの時代と違い、印刷物は社会変革のシンボルではすでになくなり、都市システムへの「寄生物」に変わった。無料の印刷物の流過程や置かれる場所についてみると、それらの印刷物の社会への「寄生」はクリエイティブで、芸術創作と類似する特性を持っていると指摘できる。

さらに、現代社会で、人間は自らを社会に「寄生」させている。様々な都市システムを利用する芸術創作は、このことを教えてくれる。第三節では、都市システムに寄生する芸術作品を分析する。ここから、「寄生」の芸術は人々の共通の経験に基いて、都市システムに対する借用や巧みな転換を通じて、啓発性の表現方式によって、社会を改革しようとする事が分かる。第四節では、人の感覚器官に激しい刺激を与える作品や直接に概念から創作される作品と比較しながら、「寄生」の芸術に含まれているユートピア性と社会規則に対するささやかな違反行為という特性について明らかにする。最後に、私の作品の立場を明らかにした上で、「寄生」についての芸術実践（「掲示板としての川」）についても記述する。

結び

「真実」、「風景」、「寄生」という三つの概念を巡る思考は、私の博士課程における殆どの芸術活動を支えてきた。そもそも、「真実」の追求は、私の芸術創作活動の起点であった。「風景」についての考察は「真実」を辿る過程の中の手がかりとなるものである。「寄生」は、私が風景について考察する過程で、少しずつ形成してきた芸術上の立場である。それらについての考察は今後も私の芸術創作活動の基礎としたい。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、筆者の作品創作の背景をなす現代社会の問題の焦点として、「印刷物」をテーマとして論じたものである。筆者は、デジタル時代にあって相対的に古いメディアである印刷物の特性に目を向け、創作の素材として取り上げてきた。論述にあたって、筆者は印刷物に関連する「真実」、「風景」、「寄生」という3つのキーワードを抽出し、それぞれについて今日的な事例を挙げて説明するとともに、それがどのように自己の作品の発想と関連しているのかを述べている。

第一章「印刷物と真実」では、写真を用いてデザインされた印刷物が伝達する情報の真実性の印象と、操作された虚構性の問題が、映画「トゥルーマン・ショー」やケン・ゴンザレス＝デイの写真作品を例に論じられる。この文脈のなかで筆者は、自作「理想的な生活」を紹介し、商業的印刷物（中国の不動産販売用チラシ）がもつあらわな虚構性を逆に利用しつつ、まったく別な種類の創造的意味を見出す可能性について論じる。続く第二章「印刷物と風景」では、ステレオタイプ化された名所絵景の風景、とりわけ絵葉書の風景イメージについて論じ、そこに求められる「永遠性の仮象」に注目する。筆者はこの

特性を利用して、風景に操作を加えた12種の虚構の絵葉書を用いる「小豆島の絵葉書」をコミュニケーション・プロジェクトとして行ない、ステレオタイプ化された風景認識の変容を実験的に試みている。最後に第三章「印刷物と寄生」では、現代の都市に氾濫する無料配布のチラシ印刷物に注目するとともに、一方で、同じく都市システムに寄生するかたちで行なわれるマイケル・ラコヴィッツらの実践について論じ、そこから、印刷物を通じての「寄生的な」芸術のあり方の可能性を探っている。

以上の3つの印刷物に関連したトピックは、一見それぞれ別個の話題を扱っているようであるが、全体としてよく考え抜かれた一貫性を示している。それは、「ありふれた、日常的で平俗な印刷物のイメージ」を利用しつつ、それらに前提されている自明の意味を巧みに解体させる意図をもっており、アイロニーに富んだ現代社会への批判——筆者自身の言葉を借りれば「社会のおとなしい変革者」——としての芸術実践の可能性を探るものとなっている。確かに、筆者自身の創作上の実践は、いまだ必ずしもこのようなコンセプトを十全に表現したものとは見えないかもしれない。とはいえ、本論文は筆者の芸術がもつ方向性の現代的意義と問題意識の独創性をよく示しており、その点において高く評価することができるであろう。

（作品審査結果の要旨）

申請者は、印刷された媒体について「真実」、「風景」、「寄生」という三つのキーワードを軸に研究し、作品制作を行った。作品を通じて人々とのコミュニケーションをスムーズに進めるため、日常的に受け入れられている形式「絵葉書」や人々の習慣的な行為モデル「風景」を使用する。提出作品は以下の4点であった。

「小豆島の絵葉書」は、ネットからダウンロードした小豆島の風景に虚構の事物（小豆島の歴史、現在、未来）を付加した12種の印刷絵葉書と、そのちょっと変な絵葉書に対する島の人達の感想が書き込まれた返信を掲示した作品。「理想的な生活」は、現代中国の様々なマンションチラシから文字と建物の部分を取り除き、意図的に接合された風景だけを残して浮かび上がらせる作品。

「和歌」は、和製チョコレートのパッケージ1枚を精緻な手作業で文字が認識できる最小限に切り刻み、和歌が読み取れるよう再構成したコラージュ作品。「掲示板としての川」は、PC上に書き込まれる落書きを夜の川面にプロジェクションしながらコミュニケーションした映像作品であった。

申請者は、中国で大量に出回る不動産屋のチラシを例に「宣伝広告の虚構的な描写と中国の社会状況において作成者が伝達したい明白な情報がある一方で、無意識のイデオロギーや隠された意図がある」と言う。また「絵葉書式の風景」では、符号化された風景、擬態化された自然について「定着した風景の見方は、人間の自然に対する態度を反映していく。」とも言っている。

申請者の芸術創作活動の起点は、「真実」の追求であり、作品が社会に対して持っている「寄生性」は、本人の芸術上の立場である。

マイルドな批判的眼差しの中に、柔を持って剛を制すと言うしたたかな表現の戦略が見て取れる。中国の現代美術に多く見られる物量化と巨大化した表現をすり抜けていこうとする申請者の表現は、知的な笑いを与えてくれる特筆すべき内容であり、審査メンバー全員の一致した高い評価を得て合格とした。

精緻でしなやかさを持つ申請者の表現が、更なる実践的展開を繰り広げていく事を期待したい。

（総合審査結果の要旨）

本論文は作者の作品制作のコンセプトの骨格をなす「真実」「風景」「寄生」の3つのテーマの論点から様々な事例をあげ、作者の作品制作での表現思考との関係を通じて分析と考察を加え論述している。

情報化社会における社会環境の中で、印刷物が人間社会に与えるコミュニケーションの構造に深い分析を加え、現代社会で生み出される様々な情報が人間の生活のコミュニケーションのあり方の変様性に照射し、生活にかかわる印刷物の中に新たに見いだされた意味の表象、社会における印刷物の流通、通信の機能における手段等のプロセス、場所に対する印刷物の寄生によって生み出される環境などをあげて印刷物の社会的特質から新たな表現の発生に向けた可能性のあり方について論述している。

また、事実と虚構、仕掛けられる場やプロセス、中心性の喪失から寄生へ、といった3つのテーマと対応した論考は、人間のアイデンティティと芸術との深い関係性が作者の中に重要な主張として論述されている。特に「寄生」での論考は現代の美術というフレームの有効性に疑問を投げかけ、日常と芸術の境界に表現の現実を求めている点で新しい視点が読み取れる。

しかも、自作の実践的な制作を通じてその表現のプロセスを補填しリアルな作家としての体験で得た感性で語られ述べていることは特異な論文として評価出来る。作者は芸術の表現の中に仕組みられた社会性に対する意味と実践の介在について照射し、その相互の関係性の中における条理と不条理について問いかけた。

たとえば、印刷物の真実と虚構が錯綜している表象によって生じる「アウラ」に例を挙げ、現実の体験によって新たな芸術の印刷物の持つ手段における道筋を可能性として導いた。

審査会では論文の日本語表現に対する能力に対して不十分との指摘があった。

作品については、2点はインスタレーション、映像作品、平面作品の合計4作品が博士課程作品審査対象になり審査された。

作者は中国の近年での経済発展する社会状況の中で、日常生活と情報社会のもたらす社会矛盾に表現の起点を置き、いずれも日常の生活の中に表現の現実を見ている。

「絵葉書を使用した通信システムに着目し共有する日常のイメージを異化する試み」、「情報化時代の中国での不動産チラシによる現実と虚構にたいする作品」、「和歌はお菓子のパッケージの文字によって日本の和歌の文章を探し出す平面作品」、「川に掲示板のように文字を映し出すサイトパシフィックな作品」の4作品である。

現在のデジタル情報化時代にネガティブにとられがちな印刷物の持つコミュニケーション手段と芸術のコラボレーションについて、逆にそのアナログ的、物質的、身体的直接性に着目し、社会環境の生活システム構造の手法のプロセスを介在させた表現としての展開を見せた。さらに日常生活のサイトパシフィックな現場性の「寄生」の作品の表現への提示は注目された。

近作では日常生活で当たり前目にし、廃棄物とされるような様々なお菓子のパッケージなどを利用し、そこに表示された記号の中から絵画的な表象に再構築する作品の表現の新たな展開に進んでいる。

作品及び論文は創作する行為と作品の原理をとともに追求しており、新たな表現の地平を開こうとする強い意志に貫かれている。

審査会において、博士論文発表会でのプレゼンテーション能力は芸術家にとって重要な表現要素であり作者においてはこの点が不十分であるとの指摘があり、この点が評価対象として問われ審査会において討議された。しかし論文内容、作品評価において審査メンバー全員の一致した高い評価を得た。

以上のような評価において、表現者を志す者の論述にふさわしい本旨と可能性をはらむ本論文、及び作品について、優れて博士学位者に値するものと全員の審査員が認めた。